【 4 】

氏　　名　宮（みや）　紀（のり）　子（こ）
学位の種類　博　士（文　学）
学位記番号　文　博　第 225 号
学位授与の日付　平成 14 年 7 月 23 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻　文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目　大元ウルスの言語資料と出版文化

論文調査委員　（主査）教授 平田昌司　教授 金　文京　教授 杉山正明

論文内容の要旨

チンギス・カンの登場によって幕をあけたモンゴル時代は，従来，モンゴル人の漢文化に対する無理解，四階級制による漢族文人の冷遇などにより中国の伝統文化・価値観が徹底的に破壊された暗黒の時代，として語られがちであった。一方，白話（口語体）をとりこんで書かれた元曲（散曲・雑劇）や平話など新しい文学は当時めざましい発展をみせており，元代を代表する文学作品としての評価が定まっている。これら元曲・平話は，口語語彙を多用すること，あるいは平話のテキストに挿絵がついていることを根拠として，おおまかに「庶民文学」「民間文学」とみなされる傾向がある。さらに，こうしたいわゆる「庶民文学」勃興の理由として，漢文化に対して無理解なモンゴルが漢族文人を冷遇した結果，鬱屈した文人がエネルギー発散の場として白話文学を選ぶ，という図式がしばしば想定されてきた。論者は，元代の多くの出版物が文体・挿絵の特性ゆえに「民間」的であるとみなされ，そこに記録された事実，収められた詩文，その性格までも「民間」という前提に沿って解釈されがちであることに疑問を向ける。そして，「民間」ということばがどの社会階層を指すのがさえ非常に曖昧であること，書物を享受できた階層や識字率についての具体的な状況が判明していないなかでの「民間」概念の濫用はあやういこと，を強調する。

また，モンゴル自らの手によって書かれたペルシャ語史料の研究の進展，各国でつぎつぎと発見公開された出土文物・文献資料の調査によって，「文化の破壊者」としてのモンゴル帝国像は大きな変化を促されつつある。また元代の朝廷や地方の各文化機関のシステム・科挙制度・文人の動向など基本的な事項の把握について，従来の研究にはなお不充分な面があったことも，知られるようになりつつある。このような状況のもとで，既知の史料についても，それがいかなる背景・枠組みのもとで，いがなる集団・個人によって編纂あるいは刊行されたかを考察し，偏見なしに読み返すことにより，定説とは全く異なった理解が可能になる場合も存在することを論者は主張する。そして，通俗的と見られがちであった口語の啓蒙書・絵本がモンゴル朝廷の現職の高官等によって国家の儒教文化政策の一環として刊行されていたこと，全国的に儒教教育の普及がはかられる中で14世紀江南地区において官民共同の出版が爆発的な展開をみせていること，などの諸点を指摘し，文化の発展に元朝が大きな役割を果たしたことを述べる。

以上に要約した研究の現状および問題意識から出発し，本来不可分であるはずの歴史・文学・語学・美術・宗教等諸分野の間に存在する意識の垣根をとりはらい，多角的な資料分析によって，元代の社会文化を再考しようとする試みとして，本論は構想された。とりわけ，冒頭の伝王振鵬筆「貨郎図」，巻末の「孝経図」などの図像資料を利用した分析は，その具体的な実践として意図されたものにほかならない。

「序章――「貨郎図」が語るもの――」は，14世紀初頭，元朝のお抱え画家として活躍した王振鵬の筆と伝えられる「貨郎図」中に商品として書物が描かれていることに着目し，かれの時代に至ってはじめて，貴族・富裕な文人階級のあいだで普通に商品としての書籍が流通し始めたことを言い，全体に関わる問題提起をおこなう。

続く第一部（全四章）は，元代口語体資料の性格と絵本をめぐる議論を中心とする部分である。

第一章「『孝経直解』の出版とその時代」は，モンゴル政府のウイグル人高官であった貫雲石（セヴィンチュ・カヤ）の著作『孝経直解』が，従来考えられていたような民間の低級な絵本ではなく，実は仁宗アユルバルワダを中心とする文化・政治サークルの手によって作られた，国家的記念出版物であった可能性の高いことを論じる。その根拠とされているのは，第一に1307～08年の政治・社会的環境をめぐる検討の結果，第二に『孝経直解』挿絵が，故宮博物院蔵「趙孟頫『孝経図巻』」と多くの構図を共通にする事実，である。『孝経直解』は，これまでその特異な文体について注意されることが多く，挿絵にまで言及されることはほとんどなかった。『孝経図巻』との類似性は，論者によって発見されたことがらのひとつである。さらに絵解きの版本『列女伝』が元朝治下に刊行されていることの意義などについても，本章で触れられる。

第二章「鄭鎮孫と『直説通略』」は，モンゴル語直訳体と漢語口語語彙を用いて書かれた中国通史『直説通略』について，論者自身が北京図書館に赴いて行った書誌学的調査結果をふまえ，書物としての特徴，使用されている文体に関して記述したのち，著者鄭鎮孫に関する伝記，その著書からうかがえる中国史観，モンゴル時代に世界各地で編纂されている「通史」との関連性，『直説通略』の依拠した原資料，などの諸問題に関しても考証がすすめられる。そして，この書物がもともと皇太子時代のシディバラの教育を目的として編纂され，彼のカアン即位を記念して刊行されたものと見られることを説く。

第三章「モンゴル朝廷と『三国志』」は，庶民の読み物が講釈師の種本であろうと考えられてきた元代「平話」の性格について検討し，平話・元曲と文人層（民族を問わず，官僚から佛教の僧侶，道士まで）との結びつきの強さを，『蜀漢本末』『関王事蹟』など，これまでほとんど用いられてこなかった諸資料を引きつつ分析した。

第四章「モンゴルが遺した『翻訳』言語――旧本『老乞大』の発見に寄せて」は，元代碑文などに見られるモンゴル語「直訳体」と呼ばれる文体が，アルタイ系民族と漢族との接触の結果として北方中国で発達したクレオール的中国語「漢児言語」を反映するとみなす説への批判を展開した部分である。1998年に韓国で発見された旧本『老乞大』はモンゴル時代に編纂された中国語会話書であると推定され，そこに見られる会話文こそ「漢児言語」そのものであるとする説が，これまで提出されてきた。この立場を支持する研究者の一部は，「直訳体」と「漢児言語」とが質を共通にする言語だと考えている場合があった。論者はそれに対して，南宋・金・モンゴル・高麗時代に漢族と非漢族（女真，モンゴル，高麗など）の間で交わされた対話を記録していると考えうる史料の数々を自らの手で見いだし，そこに現れた特徴が旧本『老乞大』とは異なるものであることを主張する。論者は，先行する研究も踏まえ，モンゴル語とペルシャ語を公用語としていたモンゴル時代，政府の公式文書はモンゴル語からの翻訳「直訳体」で書かれることになっていたことを確認したのち，その方式と文体は高麗の翻訳システムにもとりいれられ，その後も李氏朝鮮にまで受け継がれている事実を新たに指摘した。さらに『高麗史』『朝鮮実録』を利用して，明と朝鮮との関係冷却化，言語・モノの交流の断絶について説明が加えられ，そこから朝鮮の司訳院の「直訳体」およびモンゴル語テキストはすべて高麗時代に元朝から入手したものであったことを推定する。結論部分では，旧本『老乞大』の言語はモンゴル語原文からの翻訳であったとする論者の見解が示される。

第二部（全三章）は，第一部でとりあげられた資料の背景，特に十四世紀初頭における元朝の文化政策と出版活動について考察した部分である。

第一章「大徳十一年『加封孔子制誥』をめぐる諸問題」は，1307年に武宗カイシャンによって出され，モンゴル政権によってそれ以後大規模にすすめられる儒教文化政策の原点ともいうべき「加封孔子制誥」，およびそれに関連した元代文書を扱う。孔子の称号に「大成」の二字を加えることを定めたこの詔が，元朝支配下の各地で孔子廟などの建設が進められ，官民共同の組織的出版が展開されるきっかけとなったこと，詔を刻した碑文は中国各地に50以上現存し，石刻史料の利用にあたっての問題点を示す存在であること，が説かれる。なぜ元朝が孔子に称号を与え，碑を建てねばならなかったのか，これらの問題についても論者の見解が示されている。

第二章「『廟学典礼』箚記」は，元朝の江南における学校関連公文書を収めた『廟学典礼』を対象とした。従来不明とされてきた著者が胡貫夫なる人物であったこと，もと釈奠図を含んでいた可能性の高いこと，挿絵が明・朝鮮・日本に伝わって儒教文化のイメージ形成に寄与したこと，などが推定されている。

第三章「程復心『四書章図』出版始末攷――大元ウルス治下における江南文人の保挙――」は，同書の巻頭に附された元朝の公文書四点を紹介・読解し，元代の江南文人の保挙制度と国家出版システムについて考察し，科挙再開以前から，元の朝廷が才能ある在野文人の採用に尽力していたこと，元代の文人にとって著書における口語体の使用や挿図の存在は低俗性

と結びつくものではなかったと説く。

「終章——絵本と白話の享受者たち——」は，絵本，あるいは口語体の戯曲・小説の享受者が，元のみならず明・清・朝鮮・日本においても君主や王族・官僚・文人たちであったことを，資料を挙げつつ示し，全体をしめくくる。

論文審査の結果の要旨

1980年代以来の中国大陸においては，これまで未公開だった文献の出版，過去に知られていなかった資料の発見・発掘があいつぎ，関連分野の研究は著しく活況を呈している。本論文が対象とする元時代もその例外ではない。加えて，モンゴル史研究全体の進展により，さまざまな文化的事象に対する解釈が大きく変化する可能性も拓かれつつある。論者は，こうした資料的条件・研究動向の変動の中にあって，かつての研究者が直接目にする機会を得なかった同時代史料について多面的かつ精力的に調査し，書籍の出版・流通・伝承をめぐる数多くの新しい指摘をおこなってきた。

第一部の第一章・第二章は，元代に編まれた『孝経直解』『直説通略』について，いずれもカアンの即位記念出版物として刊行された可能性を，史的背景の詳細な検討を経て示す。以上の二章，および第二部の第一章・第三章は，元代における朝廷の文化政策および出版システムの意義を，具体的に実証しようと試みており，本論文の中で最も高く評価されるべき部分であろう。とりわけ，北京・台北などの資料所蔵機関に赴いての現地調査などを通じて「物」としての一次資料自体を直視しつつ分析する姿勢をとり，宋元代に描かれた「孝経図」と『孝経直解』の挿絵との類似を説き，『直説通略』の編纂上の特色に関する指摘を行うなどした点は，本論文の特色となっている。

第一部第四章は，高麗で作られた中国語教科書『老乞大』に言う“漢児言語”，および元代・明代のモンゴル語直訳体中国語，さらに1998年に韓国で発見された新資料である旧本『老乞大』の言語をめぐる議論を中心とする。“漢児言語”については，1954年に故太田辰夫氏が，「漢児」とは「金朝旧管下の諸民」で，その「間における共通語」が“漢児言語”であり，モンゴル語直訳体の「基盤として北朝以来の“漢児言語”の大きな流れを推測することができる」とみる説を提出して以来，定義と性格づけに曖昧さを残したまま，種々の理解や解釈が公にされてきた。論者は，“漢児言語”とモンゴル語直訳体の関係について先行学説の全面的整理を試み，史料を博捜して“漢児言語”説をめぐる諸問題を明確なかたちで提示した。この点は，中国語史に対する本論文の重要な寄与である。さらに，元朝の文書行政の方式が次の明朝に受け継がれたことをよりどころに明代直訳体資料の位置付けを定めたこと，高麗における外国語翻訳機関における元の影響を解明したことも，注意すべき貢献である。元から明にかけての言語資料の利用にあたっては，今後，論者の提出した見解に留意せざるを得ないであろう。ただし，旧本『老乞大』の漢語が「本来はモンゴル語に付された傍訳に過ぎなかった」と結論を下している点は，慎重な議論が求められる。

これ以外に，第一部の第三章，第二部の第二章および終章は，元朝の文化政策あるいは出版システムの解明をめざして調査・執筆された部分であり，上述の論点をさまざまな角度から補強している。

本論文の各章において，論者自身により新しく紹介・利用された史料は数多い。各章の注釈の中にも，興味深い発見が随所にちりばめられている。これら多数の史料を自らの目と手でひとつひとつ発掘し，時代の政治的・文化的背景に留意しつつ，個々の出版物の刊行経緯を丹念に解明するためにはらわれた努力はきわめて大きなものであったはずである。全体を通じて，元代の出版・翻訳システム，文化政策の研究に携わる者にとり，参考する価値の高い論文となっている。

ただし，不足に感じられる点がないではない。新史料に見出だされた事実の紹介に力点を置いたためもあってか，論証の手順に関する配慮が不充分なままの記述が残っている点は惜しまれる。引用史料の訳文，モンゴル語固有名詞の漢字表記による推定形などには，訂正を必要とする個所も時に見受けられる。また元による中国伝統文化の破壊が過度に強調されてきた過去の研究状況——おそらくは清末革命運動の民族意識，抗日戦争期のナショナリズムに起因する——に対し，論者は元による中国伝統文化の重視，その政策システムの合理性を強調するけれども，そのために宋代からの連続性・継承性の検討がやや手薄になってしまった面もないではない。宋遼金元明の文化的継承関係は，未解決の課題が多く，論者自らの手による今後の研究にも期待する。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年5月28日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。